

第IX章 寄稿

1. 田原坂攻防戦に関する戦史的考察

日本大学教授 浅川道夫

a. 西郷軍の挙兵と熊本城包囲

明治10(1877)年2月から9月にかけて戦われた西南戦争は、西郷隆盛を擁する鹿児島の不平等士族が党薩諸隊を包括しつつ、明治政府が鎮圧のために派遣した征討軍と九州各地で武力衝突を繰り返した、最大にして最後の士族反乱事件である。武装蜂起した西郷軍は、1万3千人余の私学校党を主力に、党薩隊と呼ばれた周辺藩士族の有志7千人余と、薩摩・日向・大隅三州で集めた17～40歳の徴募兵約1万人を加えた3万人余の兵力を有し⁽¹⁾、8カ月にわたる戦いは内乱の様相を呈するものとなった。

西郷軍挙兵の契機となったのは、川路利良大警視の命を受けて鹿児島入りしていた中原尚雄小警部らを私学校党が捕縛し、西郷暗殺を自白させたことだったされる。この暗殺計画の真偽は今もって不明だが、急進的な私学校生徒らは明治10年1月29日～2月2日にかけて、鹿児島にあった陸海軍の火薬庫を襲撃し、多数の武器弾薬を掠奪するという事件を起こした。事態を重く見た私学校幹部は西郷を交えて協議を重ね、「政府問罪」という大義名分を掲げた挙兵を決議した。私学校では2月12～13日に歩兵7大隊(1大隊は10小隊より成る)・砲兵2隊(四斤山砲28門、十二斤野砲2門、臼砲30門)・輜重隊を編成し⁽²⁾、14日に陸軍大将の正装に身を固めた西郷の閲兵を受けた。この日別府晋介率いる「六番七番聯合大隊」が前衛として先発したのに続き、他の大隊も15～17日に逐次鹿児島を出発した。

熊本に到着した西郷軍は2月21日に軍議を開き、「城北より短兵急に突入し、吾大軍を以て、三面合撃せば、一挙して城乃ち陥らん⁽³⁾」との認識にもとづき、熊本城への強襲を決定した。西郷軍の方略は、「正面軍は、一隊は、千葉城、厩橋より新屋敷方面に向ひ、一隊は、山崎、下馬橋、花畑、洗馬、新町方面に向ひ、以て城の東西を攻撃し。背面軍は、一隊は段山より本妙寺に向ひ、一隊は新堀方面より京町、出町に向ひ、以て城の西北を攻撃し。正面背面相応じて之を強圧し、其陥落を期せんとするに在り⁽⁴⁾」というもので、次のように各隊の部署を定め⁽⁵⁾、22日払暁を期して攻撃を開始した。

正面軍 12小隊半 2500人

四番大隊(大隊長 桐野利明) 4小隊 800人
五番大隊(大隊長 池上四郎) 8小隊半 1700人
一番砲隊

背面軍 21小隊 3000人

一番大隊(大隊長 篠原国幹) 8小隊 1600人
二番大隊(大隊長 村田新八) 3小隊 600人
聯合大隊(大隊長 別府晋介) 10小隊 800人

大砲隊 当初は砲2門

実際戦場に現出せしものは山砲約10門、臼砲若干門

熊本城の守備にあたる兵力は、鎮台本営146名、第十三連隊1904名、砲兵第六大隊330名、予備砲兵第三大隊98名、工兵第六小隊106名、第十四連隊第一大隊左半大隊331名、警視隊400名の計3315名⁽⁶⁾であった。熊本鎮台の司令長官谷干城少将は、「過半数の兵員が徴兵⁽⁷⁾」である鎮台兵の戦力では、剽悍な西郷軍を野戦で邀撃しても勝算が低いことを認め、防禦に専心する方針を固めた。かくて2月18日に西郷軍接近の報がもたらされると、城門を一斉に閉ざし、守備兵が下記のような配置についた⁽⁸⁾。

千葉城附近 千葉城を中心とし厩橋から棒安坂に至る線

歩兵2中隊 野砲山砲各1門 別に此方面の為め野砲1門を備ふ

下馬橋附近 下馬橋を中心とし嶽の丸から東厩橋、西山砲營に至る坪井川の線

歩兵2中隊 警視隊1隊(50人) 山砲1門 別に飯田丸に野砲臼砲各1門を備ふ

古城附近 県庁を中心とし東山砲營から坪井川濠端に沿ひ北折して古城に達する線

歩兵2中隊 山砲2門 臼砲1門

藤崎台附近 藤崎台を中心とし東一日亭より西北に折れ漆畑に至る線

歩兵4中隊 警視隊3隊 野砲臼砲各2門山砲1門

埋門附近 埋門を中心とし東長岡邸より西野砲營に至る線

歩兵2中隊 警視隊2隊 山砲5門臼砲2門

本営は宇土櫓にあつて、予備として歩兵2中隊を十三連隊營所及西出丸に置いた。

西郷軍による攻撃は2月22～24日にかけて繰り返し行われたが、砲隊による火力支援が十分でなかったこともあり、熊本城を陥落させることはおろか、城内への突破口を開くこともできなかった。加藤清正によって築かれた熊本城は大規模かつ堅牢で、西南戦争当時の野戦砲と歩兵のみでこれを攻略するのは困難だった。しかし西郷軍の攻勢は熾烈で、至近距離へと肉薄して来る薩摩兵に対し、熊本城の守備兵は小銃火力を以て応戦した。熊本鎮台における籠城前の弾薬備蓄を見ると、「スナイドル実包」1,285,800発・「エンピール実包」878,700発とあるが⁽⁹⁾、急激な消費に直面して「遠い処やさぐりうちといふ様な場合には、先づ以てエンピールを用ゐ、イザといふ時にスナイドルを有効に用ゐるといふやうに、一人で二挺の鉄砲を使ひわけ⁽¹⁰⁾」弾薬の節約につとめた。

熊本城守備兵による「胸壁」構築は、持場に就いた兵士がそれぞれ「野戦作業」の要領でおこない、「戦争最中追々胸壁を築造せり⁽¹¹⁾」とあるように、戦況の変化に合わせて臨機に急造されていった。一方、数回にわたる強襲に失敗した西郷軍は、24日以降「賊軍城外各所要地に数個の塁壁を構え、城を環周して昼夜攻撃す⁽¹²⁾」とされるような対陣持久の態勢に転じた。その後熊本鎮台の将兵は長期にわたる籠城戦を強いられるが、「守城中最モ苦シマシタノハ糧食ノ欠乏」であったといわれ、「谷少将ノ指揮ノ下ニ五十有三日間外ニ強敵ト戦ヒ内ニ飢餓ヲ忍ンテ堅忍持久」することとなった⁽¹³⁾。

この間、籠城から一週間を経た3月1日時点では「城中ニ糧米（玄米含ム）六百六十六石七斗ヲ算ス、一日ノ消費量二十九石ナリ、二十三日分ヲ余スノミ」との見込みで、20日に「糧食漸次欠乏本日以降一部ノ米粟混用ヲナス」との対策が取られたのに続き、31日には「本日ヨリ米粟混用ヲ全体ニ行フ」こととなり、4月4日以降は「粥食ヲ用フルノ窮状ヲ呈ス」との状況になった⁽¹⁴⁾。籠城戦に参加した兵士は、こうした実情について「粟粥を並の柄杓をもって一杯を限るとなり。依って空腹に至り力出ず・・・これ既に糧尽きたるの証なり。もし敵この機を察し、疾く攻むるの勢に至らば、一挙して城抜くべし。実に危急に切迫するの勢なり⁽¹⁵⁾」と記している。

b. 高瀬附近の戦い

西郷隆盛挙兵の報を受けた明治政府は2月19日に征討命令を発し、有栖川宮熾仁親王を征討総督に任ずるとともに「山縣（有朋）川村（純義）両中将ヲ参軍ニ、野津（鎮雄）少将ヲ第一旅団、三好（重臣）少将ヲ第二旅団司令長官ニ任シ、総督本営ヲ大阪ニ置キ諸軍ヲ部勒ス⁽¹⁶⁾」という形で、最高司令部たる征討軍団を構成した。また第一・第二旅団の編成には「各地鎮台の歩兵のほか、砲兵並びに工兵、これに僅少の騎兵を付⁽¹⁷⁾」すという混成方式がとられ、当初その内容は次のようなものであった⁽¹⁸⁾。

第一旅団（旅団司令長官 野津鎮雄少将）

東京鎮台歩兵第一連隊第三大隊 大阪鎮台歩兵第八連隊第二大隊
砲兵第一大隊の一小隊（砲6門） 工兵第一大隊の一小隊
騎兵第一大隊の15人 輜重兵若干

第二旅団（旅団司令長官 三好重臣少将）

近衛歩兵第一連隊
砲兵第四大隊の一小隊（砲6門）
工兵第二大隊の一小隊

神戸を2月20日に出発した第一・第二旅団は、22日に博多へ到着し、25日には南関へと兵を進めた。一方、熊本城への強襲に頓挫した西郷軍では、それまでの強圧策を「長圍持久、以て其糧食の竭くるを待つ⁽¹⁹⁾」という長圍策に切り替えることとなった。同時に征討軍の南下を阻止する必要から、攻圍軍の主力を北上させ「四番大隊長桐野利秋は山鹿方面に、一番大隊長篠原国幹は田原方面に、二番大隊長村田新八、及、六番七番聯合大隊長別府晋介は木留方面に向ひ、又、三番大隊長永山弥一郎は海岸に守備したり⁽²⁰⁾」という形で、新たな防禦態勢を構築した。

南関から熊本へ向かうルートには「山鹿道」と「高瀬道」があり、この二道は植木で合流して熊本に通じた。南関へ向かった征討軍は、熊本城赴援の途次植木・木葉の戦場で敗退した乃木希典少佐麾下の歩兵第十四連隊と合する一方、「山鹿方面に在りては、唯薩軍の進入を防遏し。高瀬方面に在りては、激烈なる攻撃を試みんとする⁽²¹⁾」方策を取ることに決し、「薩軍早く高瀬に占拠するの虞あるを以て、両旅団、各部隊を分遣し、三池街道より高瀬を衝き、以て機先を制せしむる⁽²²⁾」ことを図った。かくして高瀬附近においては、2月25日から27日にかけて三次にわたる戦闘が展開されることになる。

第一日目の戦闘は、高瀬に進出して菊池川の堤に布陣する征討軍に対し、薩摩兵と党薩熊本隊が渡河攻撃

をしかけ、二時間ほど交戦したのち伊倉へ引き上げるというものであった。この25日の戦況については、「午後四時薩軍は高瀬の橋梁より刀を揮って突進し、熊本隊は下流より船に乗じて渡河し、舟漸く岸に着せんとして浅瀬に達するや、衆皆跳りて水に入り呐喊して進む。官軍一弾を發せずして退く。乃ち岩崎原に進出して戦ふ」とあり、さらに「交戦数時、日没に至り、遂に夜に至り、薩軍及び熊本隊は伊倉に退き、第十四連隊は処々に燎火を焚かしめ・・・終夜前哨を以て警戒を厳にす」と記されている⁽²³⁾。

第二日目、征討軍は26日の午前7時頃に菊池川を渡河して攻撃を開始した。第一軍前衛の歩兵十四連隊は、小田村附近に布陣する西郷軍(越山休蔵麾下の3小隊)と銃火を交えた。正午頃に西郷軍が退却をはじめると、下村から安楽寺を経て木葉までこれを追撃し、そのうちの2中隊が田原坂まで進出した。乃木少佐は三好少将に戦勝を報じ、田原坂の確保を主張したが、退軍の令を受けて部隊を引き上げることとなった。他方、第一軍の本隊と後衛および第二軍は寺田村附近に進攻し、その西方台地において西郷軍と交戦した。寺田村西方台地の戦いは激戦となったが、征討軍の猛攻を受けて西郷軍は壊滅状態となり敗走した。

西郷軍の本営では、高瀬に進出した征討軍を撃破すべく「篠原、別府二氏ハ六小隊ヲ以テ木葉方面ヨリ其正面ヲ衝ク桐野氏ハ三小隊ヲ以テ山鹿方面ヨリ其背面ニ出ツ村田氏ハ五小隊ヲ以テ伊倉方面ヨリ其横面ヲ撃ツ⁽²⁴⁾」との方略を定め、一番大隊(一、三、五、七番小隊)・二番大隊(一、十番小隊)・四番大隊(一、七番小隊)・六番大隊(一番小隊)の約2,800人に出動を命じた。第三日目の戦闘は、征討軍と西郷軍の主力が高瀬を挟んで衝突した大規模な野戦であり、27日午前9時頃に始まり日暮れに至るも勝敗が決せず、午後6時頃に西郷軍が退却してようやく終結した。その戦況については「廿七日昧爽賊又大挙シテ来リ撃ツ高瀬前面ノ哨兵其機ヲ誤マラス逆ヘ撃テ奮闘ス勝敗未タ決セス日ニ加フ賊ノ別軍狭間川ニ沿ヒ来テ我左翼ニ薄ル三好自カラ兵ヲ督シ邀ヘ戦テ時ヲ移シ又大ニ之ヲ破ル前面ノ賊モ亦退ク⁽²⁵⁾」と記されている。

c. 田原・吉次における両軍の対峙

高瀬を確保した征討軍では、籠城を続ける熊本城の救援が喫緊の課題であることに鑑み、「第一・第二両旅団の本軍を以て田原正面衝き、支軍を以て吉次峠を攻撃し、両軍大窪にて相会し、共に熊本に入らしめんとするの策⁽²⁶⁾」を立て、次のように各隊の部署を定めた⁽²⁷⁾。

本軍(木葉本道を田原越えて植木に出る)

前衛 歩兵第十四連隊の第三大隊および第二大隊中の3中隊
本隊 近衛歩兵第一連隊の第一大隊および第二大隊中の2中隊
大阪鎮台の砲兵2分隊(山砲4門)、工兵2分隊

支軍(伊倉から吉次峠の間道を大窪に出る)

前衛 歩兵第一連隊第三大隊中の3中隊
本隊 近衛歩兵第一連隊第三大隊中の3中隊
歩兵第八連隊第二大隊中の3中隊
東京鎮台の砲兵1分隊(山砲2門・臼砲2門)、工兵1分隊

対する西郷軍は、篠原国幹・村田新八・別府晋介らを指揮官として、田原・吉次方面に次のような主力部隊を配置し⁽²⁸⁾、防備を固めていた。この配備を見ると、田原坂への兵力配置が顕著であり、防禦の重点が同所に指向されていたことが知られる。

| | | |
|-------|--------------------|---------------------|
| 味取山 | 五番大隊一番小隊(3/4～3/20) | |
| 金比羅山 | 一番大隊八番小隊(3/7～3/20) | |
| 田原～七本 | 四番大隊七番小隊(3/4～3/20) | 五番大隊八番小隊(3/4～3/8) |
| | 五番大隊五番小隊(3/4～3/20) | 六番大隊四番小隊(3/4～3/9) |
| | 七番大隊三番小隊(3/4～) | 二番大隊六番小隊(3/10～3/20) |
| | 六番大隊六番小隊 | 六番大隊七番小隊 |
| | 二番大隊二番小隊(3/7～3/20) | 七番大隊十番小隊(3/4～) |
| | 五番大隊四番小隊(3/11～) | 二番大隊一番小隊(2/28～3/20) |
| | 貴島隊二番(3/13～3/20) | 貴島隊一番(3/13～) |
| | 一番大隊六番小隊 | 六番大隊二番小隊 |

| | | |
|-----|----------------------|---------------------|
| | 佐土原隊 | 高鍋隊 (～3/8) |
| | 七番大隊十一番小隊 (3月初旬～中旬) | |
| 轟村 | 四番大隊六番小隊 (3月初旬～) | 三番大隊四番小隊 (3/11～) |
| 横平山 | 三番大隊五番小隊 (3/5～3/20) | 四番大隊五番小隊 (3/5～) |
| | 四番大隊十番小隊 | |
| 耳取 | 五番大隊九番小隊 (3/5～3/20) | 熊本隊五番小隊 (2/26～3/4) |
| 原倉 | 一番大隊三番小隊 (2/28～3/18) | 一番大隊二番小隊 (～4/14) |
| 吉次峠 | 一番大隊九番小隊 (3月初～3/27) | 熊本隊一番小隊 (2/26～3/27) |
| | 一番大隊四番小隊 (3/3～3/27) | 一番砲隊 (3/5～3/18) |
| | 熊本隊九番小隊 | 熊本隊十四番小隊 |
| | 熊本隊十番小隊 | |
| 三ノ嶽 | 熊本隊十五番小隊 (3/2～4/14) | |
| 大多尾 | 一番大隊一番小隊 (2/28～4/14) | 熊本隊三番小隊 (2/26～4/14) |
| | 熊本隊七番小隊 (2/26～4/14) | |
| 野出 | 三番大隊七番小隊 (～4/14) | |

もともと田原坂上には、大規模な物資移動を可能とする広い幅員をもった木葉本道が通っており、これは加藤清正が「北から、熊本城下に入る道を田原坂～植木～向坂～出町口の一本に⁽²⁹⁾」絞る形で整備したものとされる。熊本城への赴援を急ぐ征討軍にとって、この本道がほぼ唯一の捷路であり、田原坂の制圧は必須の戦略目標となった。3月4日、征討軍は田原坂の本道と吉次峠の間道に対し攻撃を行った。田原坂を守備する西郷軍は、要所に堡壘を設けて防戦に努め、征討軍を撃退した。また吉次峠では、西郷軍幹部の篠原国幹が戦死するほどの激戦となり、多大の損害を受けて征討軍の進攻は頓挫した。

このうち田原坂の戦況については、「田原坂ノ嶮要ナル阪道隧ノ如ク羊腹崎嶇兵略上守ルニ便ニシテ攻ムルニ難キノ地勢タリ我軍劇戦昼夜少シモ間断ナキモ毎ニ此地形ノ為メニ阻礙セラレ遺憾ニ堪ヘサル者ナリ抑賊兵ハ・・・私学校党ノ精銳敢死ナル者ヲ此口ニ攢メ全カヲ尽シ堅壘ヲ両崖十数所ニ築ケリ其壘タルヤ尋常胸壁比ニ非ス直ニ地ヲ鑿テ横隧ヲナシ我進路ヲ遮断シ賊ハ悉ク穴居ノ状ヲナシ以テ固守力戦ス⁽³⁰⁾」と記されている。西郷軍は舌状台地の入り組んだ地形を利用し、胸壁を伴う「散兵坑」や、「堡籠」を連ねた胸壁を構築するとともに、「鹿砦」を配置して、攻め上ってくる征討軍士卒に小銃火力を浴びせた。かくて征討軍は、「賊ハ堅壘ヲ阪上ノ高所ニ築キ、我兵ヲ下視シ、奇險ニ拠リテ防戦ス・・・進ムモノハ必ス傷キ、退クモノハ必ス斃レ⁽³¹⁾」るという状況に陥った。

翌5日、征討軍では「種々方略を尽し攻撃すれども敵亦勇敢に防禦し頑強に戦ひ壘壁鞏固にして抜く能はず⁽³²⁾」との戦況を踏まえつつも、要路確保という観点から、「地獄峠」と呼ばれた吉次峠を避け、攻撃目標を田原坂に限定する方針をとった。ここにおいて田原坂では、「官軍は死傷七千以上を算し弾薬一日三十万以上五十万を費やし薩軍は弾薬の欠乏に代ふるに常に白刃を以てし戦闘十六昼夜に亘たり其激烈を極めた⁽³³⁾」と評されるような消耗戦が繰り広げられることとなった。

d. 田原坂における戦況の推移

征討軍による3月4日の攻撃は、主として田原坂本道正面に指向されたが、二俣台の一部を占拠しただけで失敗に終わった。続いて征討軍では、6日・7日の二回にわたって大規模な攻撃を行ったが、戦況の打開には至らなかった。征討軍は当初、本道(正面)・豊岡(左翼)・二俣(右翼)の三方向から田原坂を包囲攻撃する戦法をとっていたが、正面と左翼における西郷軍の抵抗が頑強であることから、7日の攻撃では主攻を右翼に指向し、田圃の広がる溪谷を隔てた田原坂の側面に、二俣口から「前駆 歩兵三中隊」と「遊軍 歩兵六中隊」を進攻させた⁽³⁴⁾。また3門の山砲を二俣に配置し⁽³⁵⁾、攻撃にあたる歩兵を掩護した。濃霧に紛れて前進した征討軍の士卒は、西郷軍の堡壘を抜いて田原坂に取り付いたが、狙撃と白兵による反撃を受けて一進一退の状況となった。その際の戦況については、次のように記録されている⁽³⁶⁾。

「我兵阡陌ヲ超越シ直進猛撃シテ先ツ其数壘ヲ抜キ之ニ拠リ賊返戦之ヲ争フ其抜刀隊短兵直入縦横乱斫シ進退ノ剽軽ナル恰モ脱兎逸鶴ノ如シ我兵銃鎗ヲ揮フテ之ヲ支フルモ防クコト能ハス然レ任賊モ亦窮迫セス退テ其

壘ニ抛ル我兵復タ悍進猛撃シ以テ其壘ヲ抜ケハ賊又抜刀衝突シテ之ヲ奪フータヒハ此レ或ハ奪ハレ此ノ如キ者
数回ニ至ル」

この日、田原坂本道では歩兵5中隊を以て「唯タ之ヲ嚴守セシメ⁽³⁷⁾」る方針だったが、二俣の激戦に伴って西郷軍が兵力を同方面に転用したものと推定し、攻勢に転じた。しかし予想外に強力な西郷軍の反撃を受け、征討軍は退却の余儀なきに至った。ここにおいて田原坂をめぐる攻防戦は膠着の様相となり、征討軍では「連日激戦の為に死傷多く疲労亦甚だしきを以て⁽³⁸⁾」3月10日を休日とした。

翌11日、征討軍は新たに到着した砲兵を加えて山砲8門を二俣に据え、二俣口・横平山・本道の三方向から田原坂攻撃を再開した。しかし何れの攻撃目標においても西郷軍の激しい抵抗を受け、戦果を得られず旧線に退いた。征討軍は続く12日にも同方向からの攻撃を試みたが、西郷軍の抜刀隊による白兵襲入を受けて退却した。

こうした西郷軍の戦法に対し、参軍の山縣有朋は「此際、七八十名の巡査を簡拔し、短兵、敵壘を研らしめれば、奇捷を得んこと必せり⁽³⁹⁾」との観点から、13日に上田良貞大警部に巡査の選抜を命じ、「抜刀隊」の隊号を授けた。上田は南関に派遣されていた巡査から100人を選抜して速やかに一隊を編成し、二俣方面に送り出した。抜刀隊の前線投入は14日の攻勢からはじまり⁽⁴⁰⁾、翌15日の横平山攻略に際しては「五十四名一斉突入悉ク嶺上ノ賊壘ヲ占ム時ヲ費ス僅ニ五分⁽⁴¹⁾」という奮闘ぶりを示した。この戦いにおいて抜刀隊は、戦死者12人・負傷者36人の損害を出した。

続いて17・18日にも征討軍は攻勢をとったが、然したる戦果は得られなかった。野津・大山両少将は18日夜、参謀と各隊将校を招集し「官軍の、二俣、田原坂を攻撃する、茲に十有六日、激戦昼夜を徹して殆ど虚日なし・・・然れども、未だ敵兵を駆逐し、熊城の困を解くことを得ず。徒に死傷の数を増すに過ぎざるのみ・・・吾人は誓て将に此險を旦夕に破り、進みて熊城を救はんとす・・・明日休戦二十日を以て大挙進撃せん⁽⁴²⁾」との方針を示した。そして翌19日、各隊の攻撃部署が次のように定められた⁽⁴³⁾。

| | | |
|---------------|-------------------------------------|------|
| 前軍（先鋒） | 司令官 津田少佐 | |
| | 近衛歩兵第一連隊の3中隊・歩兵第十四連隊の1中隊・歩兵第三連隊の1中隊 | |
| | 歩兵第九連隊の1中隊 | |
| | 抜刀隊 1小隊（司令 川畑警部） | 計6中隊 |
| 中軍（援隊） | 司令官 永井少佐 | |
| | 歩兵第一連隊の3中隊・歩兵第八連隊の2中隊・歩兵第十連隊の1中隊 | |
| | 抜刀隊 1小隊（司令 上田警部） | 計6中隊 |
| 後軍（予備） | 司令官 乃木少佐 | |
| | 近衛歩兵第一連隊の4中隊・歩兵第八連隊の1中隊・歩兵第九連隊の1中隊 | |
| | 歩兵第十連隊の1中隊・歩兵第十四連隊の1中隊 | |
| | 砲兵分隊（砲2門） | |
| | 工兵3小隊 | 計8中隊 |

征討軍による3月20日の総攻撃は、午前6時の号砲3発を合図に、昨夜来の大雨を衝いて開始された。最初の攻撃目標は七本正面の陣地で、同所を突破したのち田原坂上に進出し、西郷軍陣地を背後から迂回攻撃することを図った。七本を守備していたのは高鍋隊だったが、征討軍の急襲を受けて潰走した。この一角が崩れると、背面攻撃を危れた西郷軍士卒の多くは退却し、征討軍は午前10時頃に田原坂を制圧した。その戦況については、「官軍敵屍を蹂み、田原坂に進み、将に一分隊を分ちて、坂頭敵壘の背に出てんとせり。敵の哨兵之を覚り、還り報せしかば、敵兵、皆驚き、兵仗、弾薬、輜重を棄てて走り、官軍、一弾をも費さずして敵壘に入ることを得たり⁽⁴⁴⁾」と記されている。

田原坂から退いた西郷軍は、改めて植木―荻迫―木留―三ノ岳―吉次峠を結ぶ防禦線を固め、熊本城への赴援を急ぐ征討軍の進路を塞いだ。西郷軍はこの防禦線において、4月15日に撤収するまでの間、25日間にわたり頑強に抵抗し続けた。かくして田原・吉次方面に配置された西郷軍諸隊は、「官軍の熊本城に連絡するを拒ぐ⁽⁴⁵⁾」という任務を、戦術的な意味合いにおいて貫徹したものと見ることができよう。

e. 結びにかえて

西南戦争における田原坂攻防戦の特性として、小銃火力による消耗戦があげられる。実際に戦跡からは大量の銃弾が出土しており、大規模な銃撃戦が行われたことが知られる。これは征討軍が「その膨大な後方に依存して『火力』重視の戦法を採用し、徴募兵の訓練未熟なことがますますこの傾向を助長した⁽⁴⁶⁾」結果といわれる。征討軍歩兵の主力小銃は、後装式のスナイドル銃 (P1867 Snider Rifle) と前装式のエンフィールド銃 (P1860 Enfield Rifle) で、当初「弾薬ハ歩兵一名ニ百発ヲ各自ニ携帯セシメ、而シテ第一予備ハ各自二百二三十発ノ量ヲ測リ定メ、輜重方ヨリ運輸シ、第二予備ハ十八万発ヲ石貫村ニ備ヘ、時宜ニ從フテ兩軍ニ分輸⁽⁴⁷⁾」するものとされたが、田原坂では緒戦から「日々小銃弾十萬発を要す⁽⁴⁸⁾」る状況となり、その補給に苦慮することとなった。

激戦となった田原坂では、「一日平均三十二万二千五百五十発⁽⁴⁹⁾」の弾薬を消費したといわれる。第一・二旅団が3月3～13日に消費したスナイドル弾薬は「百四十八万二千〇八十発⁽⁵⁰⁾」で、1日平均13万4735発の計算となることから、これと併行して相当量のエンフィールド弾薬などが消費されていたことをうかがわせる。こうした後装銃・前装銃の併用という実績を踏まえて、山縣参軍は3月24日、各旅団長に「熊本城連絡ノ後ハ漸次後装銃ヲ以テ夜比耳銃ニ交換シ以テ弾薬欠乏ニ備フ可シ⁽⁵¹⁾」との内諭を下した。ちなみに西南戦争期全体を通した小銃1挺あたりの平均弾薬消費量を見ると、スナイドル銃は3079発・エンフィールド銃は120発で⁽⁵²⁾、両者の間で消費量に大きな差があったことがわかる。

田原坂攻防戦たけなわの3月9日には、前線から「スナイドル弾薬夥シク費フカラ大坂支廠ノ貯最早尽キタカラ東京ヘ注文ニナルヘシ其時入箱区々ニテハ戦地ノ運送ニ差支ヘルカラ五百発入カ又ハ千発入ノ中匣ニテ送ラレタシ⁽⁵³⁾」との督促があり、大阪の砲兵支廠では火工填実所・雷汞填実所・薬筒製造所を建設して、スナイドルやエンフィールドの弾薬製造を開始した⁽⁵⁴⁾。しかし「熊本城連絡後幸ニシテ激戦少ク且弾薬補充ノ途ヲ得⁽⁵⁵⁾」たことによって、エンフィールド銃の弾薬はその後供給過剰になったようである⁽⁵⁶⁾。

西郷軍では挙兵に際し、「戦員に列せるもの、各一挺を携へ」て参加するという形をとったため、「銃器は『スナイドル』針打、『エンフィールド』、『ライフル』、『イツトル』、『シャーフル』、七連発銃、馬上銃等」といった新旧各種の雑居装備だった⁽⁵⁷⁾。また小銃弾薬の保有数は、各自が個々に持参した分を含めて「百五十万発程⁽⁵⁸⁾」であったとされる。この中には草牟田の陸軍火薬庫や磯火薬庫から掠奪した、「三十万発⁽⁵⁹⁾」以上のスナイドル弾薬が含まれており、西郷軍も田原坂あたりまではスナイドル銃を多用していたと考えられる⁽⁶⁰⁾。かくて「前後未曾有ノ大劇戦タルヲ以テ消費尤モ甚シトス⁽⁶¹⁾」と評された田原坂の戦いでは、弾薬の補給力が勝敗を分ける一大要因となった。その意味で西郷軍は、士族集団と主権国家という非対称な武力衝突を背景に、敗北を余儀なくされたといえよう。

【註】

- (1) 黒龍会本部編纂『西南記伝 中巻一』（黒龍会本部、1909年）284～285頁。
- (2) 同上書、274頁。
- (3) 川崎三郎『増訂 西南戦史』（博文館、1900年）149頁。
- (4) 黒龍会『西南記伝 中巻一』376頁。
- (5) 小島徳貞『熊本城史梗概』（熊本城址保存会、1927年）50頁。
- (6) 緒方多賀雄『明治十年 西南戦史』（熊本城址保存会、1938年）29頁。
- (7) 松下芳男『明治軍制史論 上巻』（有斐閣、1956年）463頁。西南戦争期全体を通してみると、熊本鎮台の歩兵は「鎮台（徴兵）」3788人・「壯兵」3882人とあり、徴兵の割合は半数程度だったことが知られる（「西南戦争官軍編制表」同上書、470頁）。
- (8) 武野正幸『血史西南役』（血史西南役刊行会、1939年）124頁。
- (9) 「熊本鎮台弾薬消耗員数表」（熊本鎮台編『熊本鎮台戦闘日記附録』刊所不記、1882年）第五表。
- (10) 金子空軒『陸軍史談』（陸軍画報社、1943年）72頁。
- (11) 喜多平四郎『征西従軍日誌』（講談社、2001年）39頁、2月23日の項。
- (12) 同上書、40頁、2月24日の項。
- (13) 第六師団司令部『明治十年熊本城攻守ニ就テ』（謄写版、1934年）4丁。
- (14) 第六師団司令部『明治十年戦争熊本城攻防一覽』（謄写版、1934年）。

- (15) 喜多『征西従軍日誌』99～100頁、4月6日の項。
- (16) 『明治十年 征討軍団記事』（陸軍文庫、1880年）12丁。
- (17) 陸上自衛隊北熊本修親会編『新編 西南戦史』（原書房、1977年）107頁。
同上書には「混成旅団を編成した理由は西郷が挙兵したら必ずこれに味方するものが多数でくると判断し、一鎮台を一団として建制旅団のまゝ出征させることは危険であると考え、各鎮台より僅少の兵を選んで旅団の編成をした」とある（107頁）。
- (18) 武野『血史西南役』180～181頁。
- (19) 黒龍会『西南記伝 中巻一』417頁。
- (20) 同上書、423頁。
- (21) 同上書、523頁。
- (22) 同上書、523頁。
- (23) 緒方『明治十年 西南戦史』101～102頁。
- (24) 佐々友房『戦袍日記』（南江堂、1891年）68頁。
- (25) 『明治十年 征討軍団記事』17丁。
- (26) 緒方『明治十年西南戦史』131頁。
- (27) 武野『血史西南役』232頁。
- (28) 黒龍会『西南記伝 中巻一』549～552頁。
- (29) 勇知之『日録 田原坂戦記』（熊本文化会館、1989年）22頁。
- (30) 『明治十年 征討軍団記事』24～25丁。
田原坂上の防備について、佐々『戦袍日記』には「田原坂本道ノ中央及其右翼ハ薩兵数百人、之ヲ守ル中央ヨリ左折シ街道ニ沿テ七本村ニ至ルマテ数十丁ノ間、亦薩兵数百人ノ守ル所タリ街道ヨリ左折シタル間道二三丁ノ間、我熊本之ヲ守ル恰モ曲尺状ノ如ク街道若クハ隴堤ニ抛リ胸壁ヲ設クル連珠ノ如シ（78～79頁）」とある。
- (31) 川口武定『従征日記 巻一』36丁、3月4日の項。
- (32) 亀岡泰辰『第三旅団戦袍日誌』（青潮社、1998年）9頁、3月5日の項。
- (33) 加治木常樹『薩南血涙史』（薩南血涙史発行所、1912年）234頁。
同書には「官軍は死傷七千以上」とあるが、田原坂攻防戦における征討軍側の死傷者数は2597人である。
- (34) 川口『従征日記 巻一』42丁、3月7日の項。
- (35) 同上書、43丁、3月7日の項。
- (36) 参謀本部編纂課『征西戦記稿 上』（陸軍文庫、1887年）「巻七」8頁。
- (37) 川口『従征日記 巻一』42～43丁、3月7日の項。
- (38) 川崎『増訂 西南戦史』235頁。
- (39) 黒龍会『西南記伝 中巻一』589頁。
- (40) 旧別働隊第三旅団参謀部『西南戦闘日注 植木口ノ部』（旧別働隊第三旅団参謀部、1878年）には、「世ニ称スル所抜刀隊ノ切込ミハ実ニ此役ニ始ル（34頁）」とある。
- (41) 同上書、39頁。
- (42) 川崎『増訂 西南戦史』244～245頁。
- (43) 参謀本部編纂課『征西戦記稿 上』「巻九」16～17頁。
- (44) 川崎『増訂 西南戦史』246頁。
- (45) 黒龍会『西南記伝 中巻一』546頁。
- (46) 陸上自衛隊北熊本修親会『新編 西南戦史』271～272頁。
- (47) 川口『従征日記 巻一』32丁、3月2日の項。
- (48) 亀岡『第三旅団西南戦袍誌』9頁、3月5日の項。
- (49) 参謀本部編纂課『征西戦記稿 中』「巻廿四」1頁。
- (50) 「明治十年三月自三日至十三日第一第二旅団スナイドル弾薬受払表」（川口『従征日記 巻一』）62丁、3月13日の項。
- (51) 参謀本部編纂課『征西戦記稿 中』「巻廿四」3頁。
- (52) 「銃砲損廃表」および「弾薬消耗表」（参謀本部編纂課『征西戦記稿附表 全』陸軍文庫、1887年）をもとに算出。小数点以下四捨五入。
- (53) 陸軍兵器本廠「東京陸軍兵器本廠歴史前記」（防衛研究所図書館所蔵）。
- (54) 三宅宏司『日本の技術 8 大阪砲兵工廠』（第一法規、1989年）36～37頁。
- (55) 陸軍省『兵器沿革史 第一輯』（陸軍省、1913年）97頁。
- (56) 前出「弾薬消耗表」を見ると、エンピール銃の弾薬使用率は約15%であった。
- (57) 黒龍会『西南記伝 中巻一』290頁。
- (58) 同上書、291頁。
- (59) 同上書、291頁。
- (60) 田原坂戦跡の発掘調査においても、こうした所見が認められている。中原幹彦『西南戦争のリアル田原坂』（新泉社、2021年）87頁。
- (61) 参謀本部編纂課『征西戦記稿 中』「巻廿四」1頁。

2. 田原坂方面における薩摩軍について

西南戦争研究 鈴木徳臣

a. はじめに

筆者が前稿「田原坂三ノ坂における薩摩軍の配備状況」『田原坂Ⅲ』熊本市の文化財第30集2013を執筆してから11年が経過した。この間、長南政義「作戦分析田原坂の戦い」『歴史群像』No.152学研プラス2018、中原幹彦『西南戦争のリアル田原坂』新泉社2021、「田原坂の戦いを考える」『年刊田原坂』vol.9熊本市2023など田原坂周辺での調査を反映した著作物や田原坂方面の戦地写真を収録した『明治十年九州戦地写真帖西南役写真帖』三の丸尚蔵館収蔵品目録No.7宮内庁三の丸尚蔵館2022などが刊行された。

西南戦争遺跡の田原坂発掘調査では遺物出土、塹壕跡の発見など具体的な物証の成果が上がったが、発掘調査だけではわからないこともある。例えば陣地の箇所、名称、何時、何処、どの部隊などの情報が不足し、詳細な戦闘経過の検討にまで至っていないのが現状である。

陣地箇所については従軍兵士の記録も「田原口本街道ヨリ西ノ方畑中ニ台場ヲ築キ居候等」⁽¹⁾と漠然としている例が多く、従軍日記や回想録等も同様の傾向である。多くは戦闘行為の記述で「同十五日、旧二月一日、一今日ハ未明ヨリ田原坂戦争場エ出陣（植木ヨリ道法七合程）、ソレヨリ昼夜を分かつ相戦ヒ実ニ砲声双方台場ヨリハゲシク合戦ニテ、夕三時比敵陣エ切り込み実ニ難戦也」⁽²⁾などである。陣地箇所が判然としない要因は、田原坂周辺で所在を特定できる家屋や地形地物に特徴が少なく目印になるものがないためと思われる。一方、熊野座神社調査地のように「田原坂北手之松山台場」、「北手松山台場」、「小松山台場」と薩摩軍側の呼称が判明した例もある。これは神社という目印が存在したからであろう。

戦地呼称 薩摩軍の日記、手記、上申書にみえる右翼や左翼などの語は、漠然としているが攻守の場所を示している。薩摩軍では周辺の位置関係を、田原坂上の休寄宿付近を本道、豊岡村宮山方面を右翼、七本轟村方面を左翼としていた。熊本隊の佐々友房『戦袍日記』には「田原坂本道ノ中央及其右翼ハ薩兵數百人、之ヲ守ル。中央ヨリ左折シ街道ニ沿テ七本村ニ至ルマテ、數十丁ノ間亦薩兵數百人ノ守ル所タリ。街道ヨリ左折シタル間道二三丁ノ間、我熊本各隊之ヲ守ル。恰モ曲尺状ノ如ク街道若クハ隴堤ニ據リ胸壁ヲ設クル連珠ノ如シ」⁽³⁾とある。なお、政府軍「戦闘報告第一回」⁽⁴⁾には田原坂の三池往還を左翼正道、二俣村から谷を隔てた田原坂に対しては正面、横平山方面を右翼と呼んでいたことが記されている。

小隊編成 薩摩軍の戦闘方法、陣地運用等については、小隊の編制を理解する必要がある。⁽⁵⁾小隊は小隊長、半隊長、分隊長の3役(3官)の下に一番から四番までの分隊がある。1個小隊は3官3名、押伍20名、兵士170名、給興4名、喇叭役1名、夫卒30名の総員228名前後。1個分隊は約50名で、5つの伍組(十組、什組とも)からなり、1つの伍組は指揮者押伍1名、兵士各郷伍列、同郷伍列を2組から3組をあわせ10名前後である。伍列とは基本的には5人1組の単位でその筆頭者が伍長、薩摩軍の最少戦闘単位になる。また、一・二番分隊は右半隊、三・四番分隊は左半隊となる。ただし、六・七番大隊は本隊(一番から五番)の小隊と異なり80名から100名前後で編成され、1個分隊は20名前後であった。

田原坂の戦いについては、従来の通説、伝承、イメージが再検証されはじめたばかりである。本稿では、既存研究の中では、田原坂周辺の具体的な守備範囲の特定に至っていない現状をふまえて、薩摩軍の同方面における動向、配備を概観しつつ、発掘調査との関連性も含めて検証したい。

b. 北進作戦からの転換

一番大隊五番小隊長相良直良によると、2月27日の高瀬での戦闘終了後の夜に伊倉で本営会議が行われた。少し長い引用する。

「村田・篠原等ノ曰ク、高瀬川ヲ隔テ戦フハ地形尤不便ナリ、明日ノ戦機着目如何ント。予及浅江直之進等答テ曰ク、高瀬川ハ予メ押ノ兵ヲ置キ、当方面ノ兵ヲ併セテ一軍トシ南ノ関本営ヲ襲予撃シ、然ル后神速軍ヲ二ツニ分チ、一ハ以テ豊前街道ニ押出シ先鋒ニ本営ヲ置キ、一ハ以テ肥前佐賀ヲ経テ長崎ヲ突キ、機械・弾薬ノ便宜ヲ占メ、快戦以テ名声ヲ天下ニ張ルニ如スト。時ニ村田曰ク、□策尤宜シ。然リト雖即今熊城攻撃中ナレハ、遠ク西郷大将ノ本営ヲ隔絶スル時ハ軍事其都合ヲ失ヒ、応策其ノ宜キニ違ヒ、且弾薬運送モ不便ナラン。落城モ方ニ日近キニ在リ、先ツ險地ニ拠リ接戦ノ便利ヲ量リ戦フニ如何スト。因テ吉次峠ヲ中央

トシ、東方ハ耳取山・那智山・田原坂及ヒ右翼ノ高山ニ線シ、西ハ三ノ嶽ヨリ河内村ニ界シ、悉ク要所ヲ占メ哨兵ヲ張り、敵兵寄来ラハ各所ヨリ直ニ援隊ヲ出シ救ハンコトヲ約ス。軍議之ニ決シ、翌廿八日朝詰ヨリ兵ヲ吉次峠ニ轉移シ、夫ヨリ各隊ヲ分配シ本營ヲ木留村ニ置ク」⁽⁶⁾とある。

六番大隊二番小隊長池田清治も「是ヨリ伊倉村ニ進軍スレドモ、空ク木留村ニ引揚。其時本營ノ協議吉次ノ嶽ヨリ東北ニ連リ田原坂ヲ固守スルニ決セリト。故ニ即時ニ田原坂ニ趣キ守兵ス」⁽⁷⁾と述べた。

相良、池田の上申書のとおり、高瀬戦闘後にこの方面の薩摩軍の作戦は政府軍の熊本城連絡を阻止することになり、桐野利秋（四番大隊長）は山鹿に、篠原国幹（一番大隊長）は田原に、村田新八（二番大隊長）と別府晋介（六、七番連合大隊長）は木留においてそれぞれ出張本営を設け、独立して作戦を計画することになった。熊本隊も木留に本営を設けた。

c. 出張本営

3月4日に吉次峠の戦闘で篠原国幹が戦死すると、田原方面を統括する出張本営は設けられず、以後は木留本営の村田新八が兼務して指揮を執ることになった。この出張本営の不設は田原方面に展開する薩摩軍の兵員補充、火器、弾薬、食料等支援の遅滞につながり、作戦面でも現地主導によるところが多くなった。そのため、単発的な攻撃作戦傾向となり、熊本の薩摩軍本営でも正確な戦況を早くから把握しかねていた。

このことがよくわかる資料がある。五番大隊一番小隊長河野主一郎の上申書によると「三月二日夜、主将余カ營ニ来リ請テ曰、木ノ葉ノ戦ヒ我軍利ヲ失ヒ植木ニ退クト聞ケリ、故ニ我自ラ該地ニ蒞マント欲スト。余対テ曰、僕既ニ之ヲ聞キ実否ヲ得ント欲シ、先ニ候騎ヲ遣リ而シテ未タ還ラス、請フ報ヲ俟テ。傾クシテ候騎帰リ報テ曰、我軍木ノ葉ニ戦テ利ヲ失フト雖、田原坂ノ炮台壯固ニシテ能ク敵ヲ挫ク、其植木ニ退ト云ハ訛伝ナリト。氏領シテ本營ニ還ル」⁽⁸⁾とある。

河野が大正5年8月に講話した『河野翁十年戦役追想談』にも同様の内容が記され、また上申書では省かれた事項もあり補足の意味でも紹介する。「三月の二日夕方木葉の方面破れ、植木田原にて戦ふこと急なりと聞き、兵を二人出して其実況を見せしめたり。そこまでは私の処より三里位あり。其夜に先生が護衛を連れて私の隊に来られて「田原は苦戦なり、破れはせんとかいとの話しぢや」と、「私も其事を聞きもしたで斥候を出しもした。もうすぐもどんそで」と云ふに、先生「我行きて見ん」と云われければ、「斥候が帰へれば戦況は知れます。依て此処にお待ちあれ。丁度よき時に御来ありたり、今牛を殺して料理中です」とて牛肉の御馳走をするに、其内斥候帰へりての報告には「田原は大丈夫なり」と、先生も其報知を聞かれて御帰へりたり。其夜半過ぎ本営より兵来り「木の葉方面へ応援に行け」との命なり」⁽⁹⁾とある。ここでいう主将、先生とは西郷隆盛のことである。

河野主一郎の上申書、追想談から知れるのは、木葉の戦闘や田原・植木方面の防備状況等が熊本本営には伝わっていなかったことである。そこで、西郷自らが河野の陣営を尋ね自分で検分すると言ったが、河野が出した斥候報告で戦況を把握した。これで同小隊の田原方面の派兵が決まる。これ以降も熊本本営では田原・植木方面の戦況を把握できなかつたため、植木に田原方面の出張本営が設けられることになったのだが、その経緯が中山盛高の上申書から伺える。

「或日、桐野利秋、池上四郎余ニ請ツテ曰ク。植木、田原ノ戦報区々ニテ確証ヲ得ス、子等至急斥候トシテ来ルヘシト。乃チ植木ニ到ルニ田原諸所ニ於テ戦益熾ナリ。然ルニ植木ノ要地救応ノ兵ナク又小荷駄方ノ設ナシ。即チ還報シテ曰ク、即今田原昼夜連戦、我兵勇猛ナリト雖モ一勝一敗、事甚タ急迫ナリ。速カニ山鹿・木留ノ如ク出張本営ヲ設クヘクカ。而シテ大小荷駄ヲ分置セスンハ縦令弾薬・給糧ノ輸送アルモ之ヲ各所ノ戦地ヘ分配ヲ如何ンセン。且報知ノ齟齬スルハ蓋シ本営ナキニ出ルナラント云フ。於是乎中島健彦、貴島清植木ニ赴キ出張本営ヲ設ケ、又我小荷駄ヲ分置ス」⁽¹⁰⁾

前稿では「のちに八番大隊と改称された貴島隊指揮長貴島清が増援のために4個小隊を率いて木留に到着したのが3月14日とされ、中山の上申書とおりであれば植木に出張本営が設けられたのは14日以降の可能性が高い」としたが、上申書や従軍日記をみると植木を経由して15日未明に田原坂に到着している。15日から20日の間に田原方面の出張本営が設けられたのか否かは不明だが、それ以降の21日頃には中島、貴島が鹿子木村に本営を設けたようだ。

大小荷駄 大小荷駄に関しては高木秀並の『萬集録』⁽¹¹⁾に「一、於熊本本隊の儀八番大隊の名称となり、同県二本木久米村へ宿陣、小松小森岩村を以本隊兵用一切の世話を成す。同隊各兵田原山鹿大津熊本等の諸口へ掛り、此時緒方面出張大小荷駄を分配す。然るに我輩も大小荷駄の名目となり、植木口へ出張すべきを貴島より伝田中鼎輔へ副し、海老原為平共々三月廿一日頃より鹿ノ子木へ宿陣、植木方面弾薬糧食人足其他の用弁、本部久米村宿営小松方へ引合弁達す」とある。

田原坂陥落後には、高木は大小荷駄の職務として弾薬製造、食料調達に携わっており、非常に興味深い記述がある。「此時、大に難せしは弾薬の乏しきを憂、或日一昼夜に弾薬一名五発宛を持せ無理に防戦せしめ、実に小荷駄の職務の難立を歎、終に久米村本部に於て弾薬製造方を可設の申本営中島貴島より達す。仍て鹿子木村にて同断官兵の討捨る所の鉛丸、土人の拾ひしを至当の代価に買入、銃薬は追々鹿児島表より続き軽創のものをして弾薬製造せしめ、兎に角一日夜に十発位宛を持たせ数十日の防戦をなし、昼夜砲声寸時も無怠、実に賊兵の難渋比すべき事を不知。剩へ食糧納米に等しきを束子飯にし、塩少々梅干三、四位を与へしもあり。兵力何が故俊鋭なるや、斯く数十日を防戦せしは大に忍たりと云んや」という。

家村助太郎は田原坂での戦闘中「飲料水は植木といふ二里も離れたところから、桶で運んで来るので、顔も洗わぬ日が多かった」⁽¹²⁾と回想している。

植木の重要性 2月23日以降、薩摩軍にとって植木は田原坂をこえて木葉高瀬に出る三池往還と熊本植木山鹿を經由して南関にいたる豊前街道本道の結節点として一大拠点であった。また、27日以降は南下する政府軍に対して田原山鹿方面の支援のための大小荷駄出張、物資集積、病院設置がおこなわれ、物資運搬や負傷兵搬送等の人夫確保のための宿陣所も設けられた。出張本営の不設もあり、作戦面においても円滑な支援とはいかなかったが、植木は田原方面の薩摩軍にとっては重要拠点となっていた。

d. 北部方面における配備状況 1 - 3月1日～3日頃 -

部隊配備 『西南記傳中巻一』は一時的な応援部隊を除いた田原・吉次方面の薩摩軍の配備を掲げている。「配備は必ずしも一定せざるもの」とし、田原より七本に至るまでの間に延19個小隊、轟村2個小隊が配備されたことになっている。しかし、これらの小隊には欠落、誤認、配備時期、場所特定などで少なからず誤りが見いだされる。例として、4日～8日守備の二番大隊九番小隊が欠落、七番大隊三・十番小隊が実際は3月7日から七本守備だが、3月4日より田原守備となっている。筆者の調査範囲では田原坂での戦闘期間中、薩摩軍は延べ30個小隊以上、党薩隊約10個小隊が投入されているが、史資料の制約で一部の部隊の配備、動向しか判明していない。

田原坂戦がはじまった3月4日時点では、まだ薩摩軍の防御態勢は確立されておらず、陣地構築も進んでいなかった。1日から3日にかけて田原坂には六番大隊の二番・五番・七番の3個小隊(2月28日夜に木留から移動)、2日に熊本隊九番小隊(田原梅木谷、3日夜には七本へ)の計4個小隊しか駐屯しておらず、主力は木葉に配備されていた。

二番大隊九番小隊 田原坂後退直後の各隊位置は、二番大隊九番小隊長重久敬一上申書に「会々五番大隊八番小隊石橋某応援スレトモ終ニ午後五時ニ至リ支ユルコト能ハス、田原エ退ク、本道ハ加治木隊、右翼ハ石橋某(後チ七月末日ニ鹿児島県デ戦死ス)、左翼ハ森岡某及国分隊我九番小隊ト共ニ守ル」⁽¹³⁾とある。

田原坂本道には加治木の六番大隊がおり、右翼の石橋某とは五番大隊八番小隊(小隊長の石橋清八は不在か)、左翼の森岡隊とは一番大隊七番小隊のことである。国分隊とは国分郷からの部隊で七番大隊九番⁽¹⁴⁾・十一番小隊のことである。

六番大隊二番小隊 3月1日より田原坂に駐屯していた六番大隊二番小隊長原田源太によると「三月三日頃、木ノ葉ノ戦争急ナルニヨリ応援トシテ山上ニ駆上リ狙撃候処、官軍岡上ニ登リ横ヨリ射撃ス。仍テ谷ヲ隔テ遠方ヨリ砲戦ス。然処(木葉)本道ノ守備伊集院權右衛門隊退クニヨリ、三門ノ砲ハ地中ニ埋メテ総軍敗潰ス。敗軍ヲ田原ヘ纏メ軍配シテ哨兵線ヲ張り、此地ヲ守ル。然ル処、翌朝未明ヨリ官軍敵シク攻撃ス。未台場等ノ備無シト雖トモ、必死ニ成リテ防戦ス。然処、山鹿口ヨリ石原一郎左衛門外ニ一隊応援トシテ来ル。石原大砲破裂ニ当リ死ス。六ノ二番小隊ニハ死傷二十名計リナリ」⁽¹⁵⁾とある。同隊が後退した箇所は陣地が未構築だったようだ。

六番大隊五番小隊 六番大隊五番小隊和田素人の従軍日記には木葉での戦闘後に「二番小隊ニモ山上ニ防御相成居、共ニ防戦イタシ居候処間モナク夜入候付、令ナクモ引上ケ町外廻ニ参リ候処、最早敗軍ニテスペテ兵隊ハ引上候跡ニテ、敵追討イタシ大勢味方寄屯イタシ大混雑ニテ、植木町マデ引上候隊モ有之。漸々田原坂へ踏止リ其夜ハ繰廻シ本道筋相守候事」⁽¹⁶⁾などと退却の経緯や田原坂での混乱した状況が記されている。

陣地構築 1日の時点で木葉には一番大隊七番、二番大隊九番、五番大隊八番、七番大隊九番・十一番の5個小隊と一番砲隊右半隊が進出し、陣地構築をはじめた。『戦地景況輯録』によると豊岡村では「三月一日ヨリ字中久保ニ賊二百名程来リ、字船底、水本、北平、岡林、西原、宮ノ原等ニ砲臺ヲ設ケ、全二日字休居宮ノ原等へ六百名程来リ」⁽¹⁷⁾とあり、田原坂では3月1日より陣地構築がはじまったようだ。

和田日記には「三月一日旧正月十七日、近在在夫五十人熊本県士ヨリ差出候付、本道筋江ニヶ所臺場等築立、操廻ヲ以番兵等相勤」⁽¹⁸⁾とあり、構築箇所は不明だが田原坂本道に台場二箇所を構築、2日、3日は同所で守備についている。構築に際して熊本県士族が人夫手配をした点が興味深い。応援に来た四番大隊七番小隊木原權太郎外二名連署上申書にも「即時応援トシテ田原口へ繰出、基本道ナル左右へ十台（砲台）ヲ築キ、二十七日間昼夜連戦」⁽¹⁹⁾とあり、田原坂本道で陣地構築をした事がうかがえる。

角田信時は3月2日の日記に「午前十時頃から、寺田忠次郎を伴って、小畑村の吉岡鬼角方へ四、五日潜伏の予定で行ったところ、思いがけなくも、田原坂へ薩兵が台場を築き、小畑、平原にかけて多くの薩兵が泊っていて、村中鶏狩等の為往き来するとのことなので、吉岡宅に中食を食べ裏山から逃げ立帰った。」⁽²⁰⁾とある。実際に台場を構築した和田、見聞した角田の記録からも、『戦地景況輯録』の記述どおり田原坂での陣地構築の開始は3月1日であることが明らかになった。

弾薬補充 3日の木葉の戦闘では六番大隊の一番（植木より）・二番・四番（植木より）・五番（途中より）の4個小隊が応援に出た。しかし、木葉の薩摩軍は夕方頃には田原坂に後退し、砲隊は砲3門を土中に埋め放棄した。二番大隊九番小隊は27日の高瀬戦闘後、植木を経て木葉田原坂に転陣したが、同小隊の五代友廣の「三月三日午前八時比、敵兵襲来ニ付防戦ニ及ト雖モ、熊本旧城下ヨリ弾薬運輸ニ閑取り、終ニ不能守、無致方味方田原坂迄繰引」⁽²¹⁾との記述からは、この頃は弾薬補充は熊本からの追送で、植木田原坂からは兵員のみでの支援であったことがわかる。五代は木葉戦の敗因を弾薬補充の不備、弾薬欠乏と指摘するが、これは一因に過ぎず、戦役全般を通して共通する薩摩軍の輜重体制全般の不備が根本要因である。

e. 北部方面における配備状況 2 - 3月4日以降 -

田原坂の戦いがはじまった3月4日には、山鹿から四番大隊六番・七番小隊、五番大隊五番小隊。熊本から五番大隊一番小隊。植木から六番大隊三番・六番小隊が派遣され、田原坂の守備は16個小隊、砲隊1個半隊、熊本隊3個小隊となった。以下に3月4日時点での薩摩軍の部隊配備を列記する。

薩摩軍部隊配備 3月4日

- 一番大隊七番小隊 七本、3月8日に二番大隊二番小隊と交代
 - 二番大隊九番小隊 中久保周辺、3月8日に二番大隊七番小隊と交代
 - 四番大隊六番小隊 轟村、3月13日に三番大隊四番小隊と交代
 - 同 七番小隊 田原坂本道三ノ坂
 - 五番大隊一番小隊 西山に転陣
 - 同 五番小隊 豊岡
 - 同 八番小隊 北手之松山台場を中心に宮ノ前・宮ノ原・休居か
- 3月8日に二番大隊一番小隊と交代。
- 六番大隊一番小隊 3月10日頃引揚か
 - 同 二番小隊 田原坂本道三ノ坂か
 - 同 三番小隊 3月12日引揚げ
 - 同 四番小隊 豊岡、3月9日に二番大隊六番小隊と交代。
 - 同 五番小隊 田原坂本道三ノ坂か
 - 同 六番小隊 豊岡、3月10日（9日か）に二番大隊六番小隊と交代

同 七番小隊 田原坂本道三ノ坂か
七番大隊九番小隊 長窪山、中久保か
同 十一番小隊 長窪山、中久保か、のち一番大隊六番中隊に改編
一番砲隊右半隊 3月上旬か、熊本に複隊
熊本隊 三番小隊 七本、3月14日から木留で待機
同 七番小隊 七本、3月14日から木留で待機
同 九番小隊 七本から木留、七本、吉次峠と転陣

一番大隊七番小隊 一番大隊七番小隊堀之内雄輔の日記によると「三月六日旧正月二十二日、午前六時頃七本繰り出し相成り、直ちに田原にて敵兵討ち掛け終日砲戦のところ、手負・戦死等おびただしくこれあり、夜に入り七本まで引き揚げる。半隊長大河平武介死す。三月七日旧正月二十三日、午前七時頃繰り出しにて右田原まで差し越し、終日双方より発砲に及び、夜入りすぎ少し手前の方へ暫時招き入れ、夜半時分より台場築き方として張り出す。三月八日旧正月二十四日、午前八時頃より右台場にて砲戦のところ、都合四日余りに至り兵疲れ、故に第二大隊の二番小隊と後退相成り、熊本久末町まで引き揚ぐ」⁽²²⁾とあり、同隊は6日～8日の3日間に七本を拠点として、田原坂での守備についていたことが伺える。

六番大隊 六番大隊五番小隊和田素人日記では「我二番小隊ハ田原坂本道筋左山手筋防御相成、我五番ハ本道筋堅居」⁽²³⁾となる。六番大隊二番・五番・七番の3個小隊は、2月28日から3月20日まで田原坂本道三ノ坂で防戦に務めるが、13日に木留本営に熊本城下引揚を願い出ている。理由は「我二番小隊并同隊五番ハ、同田原坂ニおひて永々連日昼夜戦通ニ付一同差勞候付、本城辺江只番兵迄ノ休兵多分有之哉ニ付、一兩日中ニテモ交代イタシ度隊中申出相成」であったが、「隊引上願立として同隊隊長水間勘助殿、二番半隊長原田源太殿兩人、木留本営江被差超候処、今暫ク乍太儀氣張り呉候様、隊中へ示談いたし呉候様との沙汰ニテ採用不相成候由」⁽²⁴⁾と部隊の引揚願いは却下され、翌日夕方には熊本本営から各隊より押伍2名を差し出すよう通達が入った。一旦は断るため木留本営に赴くが、結局は各隊より1名を差し出すこととなった。引揚願い却下や兵員差し出しは、田原坂方面を含めた各戦線での消耗が影響している。

田原坂陥落 田原坂が陥落した3月20日の時点で、三ノ坂口、豊岡方面の薩摩軍の守備は一番大隊八番小隊右半隊、二番大隊一番小隊、六番（七本から豊岡に）、四番大隊七番小隊、五番大隊五番小隊、六番大隊二番・五番・七番小隊、七番大隊六番小隊の半隊（3月17日より）である。

f. 北部方面における配備状況3 - 市有地（北・南）、熊野座神社、田原城跡・田原寺跡調査地 -

熊本市有地（北・南）調査地や熊野座神社調査地一帯の小字は宮ノ原だが、通称では宮山といわれ、その東が字宮ノ前である。この一帯は薩摩軍では「田原坂北手之松山台場」、「小松山台場」とよばれていたようだ。『戦地景況輯録』によると宮ノ前では3月8日、15日の戦闘が激しく、熊野座神社は8日に焼失したとある。田原城跡・田原寺跡は字上ノ原である。

四番大隊七番小隊 『丁丑之役余談』に四番大隊七番小隊財部與之進追懐談が掲載され、守備箇所について「田原坂ヨリ応援ヲ乞ヒタルニヨリ、同夜、田原坂ニ向ッテ出発ス。田原坂ノ上ナル小学校ノ後ノ椎木ノ松山ニテ戦ヒ、既ニ我軍ハココニ豆俵ヲ以テ台場ヲ築キアリシニヨリ、敵ノ銃丸ガ台場ニ来タル毎ニ豆ガ我々ノ頭ニバラバラト当たリタリ。翌日ニ及ンデ有栖川宮殿下ノ御書ニナリタル碑名ヲ建テテアル箇所ノ南方ニ当タル台場ヲ築キテ、守備シ居ルコトナリ。此場所ニ於テ官軍ト数回ニ及ンデ戦フ。」⁽²⁵⁾とある。

五番大隊八番小隊 同地での戦闘については、五番大隊八番小隊半隊長東郷重護の上申書によると、「同四日午前八時比ヨリ、敵軍田原坂へ惣進撃ニテ我共持場へモ襲来候ニ付、防戦致シ候処、午後四時頃ニ至リ敵兵惣テ引去り候。且我隊押伍以下手負九人ニテ候。尤モ敵兵ニモ死傷等過分ニ有之候ト相身へ、麦畑諸所流血有之候。同五日午前八時比ヨリ、我共持場へ敵兵襲来候ニ付、台場ノ崖へ引寄せ一同ニ狙撃致シ、敵兵七八人ヲ打倒シ候処、敵兵大ニ混乱致シ、漸クナカラ死骸等引揚ケ去リ、我隊勝利ヲ得候。且味方手負一人ナリ。同六日午前十時比ヨリ、敵兵我共持場へ攻来り候ニ付、熊ト持場ヲ捨テ百五十歩計リ一隊ヲ引揚候処、直ニ敵ヨリ台場ヲ乗り取り、田原八幡ノ社へ火ヲ掛け、互ニ防戦致シ候。且我隊即死一人・手負三人ナリ。同七日敵兵百人計リ持場近ク攻来り候ニ付、右半隊ハ正面へ防戦致シ左半隊ハ小松山へ伏セ居候処、正午時

分ニ至リ敵兵我カ台場へ突キ込ミ来ルヲ待受、正面ノ半隊・伏兵ノ半隊共一時ニ切り込ミ候処、敵兵大ニ狼狽致シ銃器・弾薬等ヲ捨逃ルヲ追撃シ、士官以下八拾人ヲ切殪シ、銃器・弾薬等夥多分捕シ大勝利ヲ得、諸所ノ台場等取り返シ候。且切込ミノ節隊長石橋清八并押伍一人手負致シ候。同八日田原引揚候処、木原慶介隊長トナリ」⁽²⁶⁾とあり、この記録だと神社焼失は6日となる。同小隊は3月8日に二番大隊一番小隊と守備を交代し熊本へ引揚げる。

中原は北手之松山台場（熊野座神社調査地）の構造について「境内の薩摩軍陣地は藁茨出土状況と段地形から見て、前塁と後塁の二、三線構造になっていた可能性がある。第一線は道路沿いに防護用の胸壁を築き、樹木なども弾除けにしたもので、北から登って来て東から攻撃する政府軍に反撃するためであり、第二線は段上で東西両方面からの攻撃に対応していたと考えられる。」⁽²⁷⁾と指摘した。樹木を弾除けとした実例としては、和田日誌3月4日に「昼夜松ノ木堤等ヲ盾ニ取り」防戦したとある。

g. 北部方面における配備状況 4 - 田原坂本道二ノ坂、谷村計介碑調査地 -

二ノ坂と谷村計介碑のある三ノ坂口で調査が行われ、本道二ノ坂調査地では薩摩軍「北手之松山台場」と交戦したと思われる窪地に胸壁を築いた政府軍陣地跡が確認された。二ノ坂から三ノ坂口にかけて通る土手と溝は古い田原坂のなごりと考えられ、遺物が集中していた。

政府軍二ノ坂砲台 調査地の南隣には田原坂本道への攻撃支援を目的とした政府軍砲台が、3月11日に大坂鎮台砲兵第四大隊第二小隊右分隊により設けられた。四斤山砲2門、護身用としてはスタール銃、スナイドル銃を備えていた。同分隊日誌に「田原坂ニ向ヒ各位置ヲ占メ砲臺ヲ築キ、正面ノ人家ト賊壘トヲ抛射シ、其距離凡五百米突」⁽²⁸⁾とあったので、砲台正面と人家の距離およそ500mの記述をもとに、助言を頂きながら現地調査を行い、砲台を構築するのに適した場所を特定した。

現在はミカン園に造成されているが、土地所有者からの聞き取りによると、開墾で夥しい数の銃弾が出土し、伝聞では陣小屋の様なものもあったらしいが、砲台跡との言及はなかった。しかし、本道二ノ坂調査地からは砲台の存在を裏付ける遺物として、砲腔内の装薬に点火するための摩擦菅が5点出土している。地図資料では、大正9年1月発行『明治十年西南戦役田原吉次植木戦蹟図』に二ノ坂の砲兵陣地が記載されている。

砲台正面の人家とは三ノ坂頭にあった松下彦次郎宅と思われる。三ノ坂守備の薩摩軍にとっては至近距離から砲撃を加えてくる二ノ坂の砲台は防衛ラインを脅かす障害となり、本道、右翼にあたる「北手之松山台場」からの攻撃対象となった。

六番大隊五番小隊 田原坂本道守備の六番大隊五番小隊和田素人日誌の3月11日には「午後（午前カ）十一比、敵大砲ヲ正面ニ据へ甚ダ繁ク打掛、中々正面台場壘メガタク一分隊ツツ当番相立、相壘メ外ハ右脇畑堤下ニ隠伏イタシ居候処、夜入次第砲モ打止候付、以前之宿陣へ帰宿イタシ繰廻シ持場相守リ、犬昼宿陣ノ家へ砲式発打込破裂イタシ候」⁽²⁹⁾とある。政府軍二ノ坂砲台からの砲撃で台場の守備を1分隊ごとの交代とし、他分隊は畑堤下に退避を余儀なくされる。また宿陣としていた家屋にも被害が出ている。

3月17日、政府軍は第5次総攻撃にあたり、田原坂本道からの攻撃を指向した。同日誌17日には「朝六時比、下左リ手ノ方江敵進撃相初メ、砲撃繁ク相打掛良（ヤ、）敵争中ニ不意ニ本道我受持へ敵十二三間所迄追々踏込、狙撃イタシ候ニ付、此方則蔵後堤ニ盾ヲ取り敵敷防戦いたし、敵八人程即座ニ打取候処早々こらえず逃去リ候ニ付、直ニ追打敵余多打取銃器その外分捕品有之。味方同隊ニハ手負戦死等老人モ無之、実ニ九勝といふモノニテ我ニ番小隊ノ内ニ即死薬師寺松次郎殿、手負萬膳殿二人有之。他鹿兒島隊ニハ段々手負即死等有之。三時比戦相止候ニ付、直ニ台場丈夫ニ築立」⁽³⁰⁾とある。「蔵後の堤を盾にして」防戦し、戦闘後のその日のうちに、陣地を「丈夫に」修繕補築している点などは、注目される。

二番大隊一番小隊 薩摩軍の本道三ノ坂上からの攻撃の支援を目的として、「北手之松山台場」より出撃し政府軍二ノ坂砲台左側面を銃撃したようで、上申書にはその事を伺わせる記述がある。「同月十七日、我隊守場并四番大隊七番小隊守場ヨリ田原坂へ官軍進撃シ来リ、我一組ハ四ノ七番へ応援シ田原坂北手ノ松山ヨリ横矢ヲ入ル。一時劇戦此処ニチ我組兵士富田七次、郎並夫卒吉左衛門戦死ス。然レトモ防御僅ニシテ動カス。官軍終ニ死骸ヲ捨テ、二十余名ノ死骸アリ、引揚タリ。本日ノ戦ヒ我本隊ノ守場ニテモ押伍樋渡退一始メ死傷アリ。其外我守場ニテハ別段劇戦ナシ」⁽³¹⁾である。本道二ノ坂にいる政府軍に対して「北手之松山台場」

から二番大隊一番小隊の一組が出撃している。一組とは伍組と思われるので、それまでに転属、戦闘で死傷が出ていなければ10名前後である。

h. 南部方面における配備状況 - 3月7日以降 -

3月7日政府軍第3次総攻撃。主攻方向が政府軍右翼の二俣口に変更され、以降同方面の中久保、立花木、七本、轟で激戦が展開された。薩摩軍の増援部隊は消耗の激しい七本方面に配備された。七本の一番大隊七番小隊は8日(7日とも)に二番大隊二番小隊と交代して出京町に引揚。「我隊ハ田原坂ニ有リテ戦フ事八九日バカリ、此間ニ我隊ノ死傷六十余名ニ及ブ」⁽³²⁾ という。

中久保の二番大隊九番小隊も8日に二番大隊七番小隊と交代した。七本方面に増援された諸隊は一番大隊六番小隊、二番大隊二番・六番(七本から豊岡)・七番小隊、三番大隊四番小隊、五番大隊四番小隊(3月10日より)、七番大隊三番(3月7日)・四番・六番の半隊(3月17日より)・十番小隊(3月8日)。熊本隊一番・九番(半隊)・十番・十一番小隊である。

七番大隊九番・十一番小隊 同隊の記録には「三月四日頃大隊長(児玉強之助)ノ指揮ヲ受ケ、田原本道ヨリ左翼三丁程ノ所へ要所有之、此ニ台場ヲ築キ此ニ守兵ス、時ニ官軍襲来、大砲・小銃ヲ発シ進撃スル事甚タ激シ」⁽³³⁾ とあり、左翼で本道より三丁とすると長窪山、中久保あたりに陣地を構築したと思われる。

八番大隊 3月15日、貴島大隊(のち八番大隊)の一・二・三・四・五・八・九番の7個小隊と附属砲隊が七本方面に増援された。貴島隊は記録が少なく、小隊数や兵員数は明確ではない。貴島隊七番小隊山口辰巳の日記⁽³⁴⁾によると貴島隊は11個小隊で、『薩南血涙史』では9個小隊である。各小隊の編制地に関しては山口辰巳日記が正確で、十番小隊とする福島隊は誤認で、十一番小隊(延岡にて編制)は未確認である。一・二番小隊は鹿児島・小林、三・四番小隊は佐土原、五番小隊は高岡、六番小隊は穆佐・大崎、七番小隊は綾・穆佐・倉岡、八・九番小隊は高鍋で編制されている。五番小隊には砲隊が付き大砲4門、兵員36名が附随する。

他に、上申書によると、豊岡台地中部から南部の中久保、橘木、立花木、七本周辺の守備に二番大隊九番小隊も含めて三個小隊が守備していたようだ。熊本隊三番・七番小隊は大多尾の守備より七本に至り、玉東山北村より轟へ通じる間道の守備についた。九番小隊は七本のままである。

『戦地景況集録』によると轟村は2月24日頃から薩軍の各出張先への宿陣として利用され「三月二日 賊兵大敗(木葉戦)ノ由ニテ轟村内字立花木へ壘守ス。同日ヨリ賊兵日々旧増凡三千人、埋原、七本、五次郎丸エ宿陣、立花木戦地エ更々出張」⁽³⁵⁾ とある。以後轟村は立花木、七本での薩軍の拠点となった。

i. 戦闘地各所への援兵

山鹿より 3月4日に山鹿から田原坂方面に派遣された3個小隊(四番大隊六番・七番小隊、五番大隊五番小隊)の経緯を記す。木葉での戦闘終了後、出張本営の越山休蔵(六番大隊長)と児玉強之助(七番大隊長)から、和田素人と蓑田一二(六番大隊一番小隊)は田原坂援兵要請のため山鹿出張を命じられた。3日午後9時頃出発し、山鹿に4日午前2時頃到着した。

和田素人『拾年の役軍中日記』3月4日には、「本営、桐野利秋殿ニハ山鹿ヨリ二里計り先南ノ関路ノ方ニ出張 戦争央ノ由ニテ、砲聲手ニ取ルヨフニ相聞得。忒人ノ案内夫ハ山鹿大小荷駄へ残シ置、外ニ同大小荷駄方ヨリ案内人壱人ヲ貰ヒ、二里先ノ戦場迄差超候処、銃弾飛来ノ場所薪小屋之内ニ桐野氏小隊長等十余名本営被召立居候付、木之葉相敗レ田原坂危急相成候付、援兵差出拾候様申入候処、桐野氏被申ニハ、是ハ案内ノ至リニ候、鳥渡(チョウド)御存ジ之通遙々進撃最中ニ候、壱人モ援兵差出儀不相叶、不気現(嫌)ニ候。我共兩人ニモドフモ仕様ナク、申シタル語モ取返スヨフ有之良アッテ、桐野氏併シ田原坂を敗ウレテハ糧道ヲタ、レ、ノド首ヲトラレテハ爰ヲ何分突出爰テモ栓ナク、明日ハ南ノ関マデ突込ム賦ノ処、実ニ残念ノ至リト涙ヲ流サレ、何レ山鹿迄引上山鹿ヲ守リ、二小隊ハ援兵ニ不遣候テハ、相叶間敷ト決議被致直ニ山鹿迄繰引ニ被引上中途夜モ相離レ、矢張り桐野氏ニ相付山鹿江翌四日朝六時過着」⁽³⁶⁾ とある。

山鹿方面の薩摩軍は南関への攻勢中で、和田素人は野営中(永野原カ)の本隊で桐野利秋、小隊長等と面会した。桐野は田原坂危急の知らせを受けて、南関攻撃を中止し山鹿へ退却を決断し、和田には2個小隊の援兵を約束した。山鹿に戻った和田素人はすぐに2個小隊の援兵と共に、案内役として田原坂に引き返した。

続いて、同日記には「急キニテ二小隊ノ援兵、田原坂ノ北山迄案内イタシ来候処、田原坂方限リハ遙々ノ戦争央ニテ何地ガ味方モ不分、良山中に窺居候得共、味方不尋ネ付何レ此ノ上ハ植木町江引上、一先味方へ引合ノ上援兵差出給候様、隊長へ我兩人ガ申入候処、其儀可然決議相成、植木町へ午後四時頃着候処、手負戦死等追々多数引上来、間モナク田原坂危休ニ付、早々援兵差出給候様申来直ニ田原坂へ着候処、早速進撃ニ相掛リ至極ノ難戦ニテ、殊ニ雨降り昼夜松ノ木堤等ヲ盾ニ取り漸々候処」⁽³⁷⁾とある。

五番大隊五番小隊 山鹿からの援兵は、当初桐野が指示した1、2個小隊ではなく3個小隊になった。和田と同道した援兵2個小隊は隊号不明だが、一つは五番大隊五番小隊と考えられる。同隊の有馬要之助従軍日記では3月4日「午前六時山鹿ヲ発シ田原ノ応援ニ赴キ、間道ヲ行き山ニ登リ岡ヲ超ヘテ行き、植木ニ出デ田原ニ行テ炮発ス、其声昼夜已ム時ナシ」⁽³⁸⁾とあり、山鹿出発時刻や植木到着後の田原坂の戦闘は、和田日記とよく整合する。4日の戦闘場所は本道三ノ坂一帯と思われ、有馬は20日まで豊岡守備についている。

四番大隊六番小隊 山鹿援兵の四番大隊六番小隊は、有馬晋介と池端方正の日記が確認されており、同隊の概略が2月12日から4月20日前後まで判明する。小隊長松下助四郎と分隊長深見清次郎は、松下2月26日、深見22日に負傷離脱しており、上申書では3月、4月の動向が欠落不明である。有馬日記によると半隊長重久嘉右衛門は3月11日田原坂方面斥候中に流弾で戦死した。全体をとおしてわかるのが押伍中村金五郎上申書ぐらいだが、漠然とした内容である。

有馬、池端の日記によると3月4日から轟村で宿陣につき、5日は那智山への攻撃、6日以降は同地での防戦を余儀なくされる。13日に三番大隊四番小隊と交代後、17日まで辺田野村に駐屯。14、15日は援軍として田原坂の戦闘に参加している。「今日前一時ヨリ同六時迄防戦シ、同九時ヨリ后一時防戦シテ轟村ノ人家江引揚、同二時ニ轟村ヲ立、辺田野村迄引ニ相成、其夜十二時ヨリ二時間木留本営ニ番兵ス」⁽³⁹⁾とある。

熊本より 交代で轟村の守備に就いた三番大隊四番小隊は10日に熊本から植木に到着後、13日から20日まで防戦に努める。「同十三日田原口出張ノ令ヲ受ケ、午前七時頃同所ヲ発シ、田原坂ノ左翼轟村ノ守兵、松木亀五郎隊ト交代シ之ヲ守ル。同十四日官軍田原坂ノ正面ヲ侵ス、守兵敗レテ数丁ヲ退ク、山下之ヲ見テ我軍利ナキヲ謀リ、即チ部下ヲ励シテ曰、今日事窮リ、依テ衆憤戦敵ヲ撃チ銃器・弾薬捨タルヲ拾ハス、各切捕ニ取り此敗ヲ贖ハント。自ラ左半隊ヲ率ヒ至リ援フ、此ニ於テ正面ノ守兵長寄直五郎隊ノ左翼ヨリ斜ニ突入、官軍散々ニ敗走ス。我兵逃ルヲ追テ忽チ三壘ヲ取り斬首五六十ヲ得、銃器・弾薬之ニ準ス。小隊長山下喜衛、押伍折田常政、貴鳥順助、児玉正三、芝義光等ニ死ス。外ニ死傷十八名ニ及フ。戦数刻ニシテ旧壘ニ引揚ク。是ヨリ正面ノ応援トシテ、交々一分隊宛ヲ出サシム。其後官軍来襲スル連日、悉ク撃テ之ヲ退ク。死傷相当、昼夜砲声止マス、両軍ノ距離三四十歩ニ至ル」⁽⁴⁰⁾とある。

交代直後の3月14日は中久保、立花木方面で開戦以来の最大の激戦に参加した。七本の薩摩軍陣地も奪還に成功。長寄直五郎隊は五番大隊四番小隊で、熊本より援軍として10日夜に七本村に到着していた。

二番大隊一番小隊 『西南記傳』によると二番大隊一番小隊は2月28日から3月20日まで田原で守備についてとされるが、実際は3月5日まで大津口二重峠で守備。7日に木留口応援のため田原坂へ派遣されており、兵士二名の上申書には交代前後のことが記されている。「三月七日、木留口応援トシテ木留へ着シ居タルニ、午後七時頃田原口苦戦ノ報アリトシテ、該所ヲ繰出シ田原へ着セシニ、夜ニ入り戦ヒ止ンテ双方台場ニ退キ探砲迄ナリシニヨリ、北手之松山台場へ交代相守ル」⁽⁴¹⁾「三月七日、木留口応援トシテ木留へ着シ各宿陣ニ休ミ居シニ、午後七時頃俄カニ集合ノ喇叭吹キ鳴シ田原口苦戦之報アリトテ同所へ繰出シケルニ、夜ニ入り戦ヒ稍ンテ双方台場へ引居タリ。翌朝田原坂北手松山台場へ五番大隊八番小隊守リ居タリ交代シ、連昼夜双方台場ニ掘リ探砲間断ナシ」⁽⁴²⁾とある。

j. 薩摩軍構築の陣地

陣地の構築では地形地物の適切利用、創意工夫、資材現地調達、短期間が求められる。もともとある地物の利用事例は本道二ノ坂、三ノ坂口谷村計介碑調査地の溝状凹部や田原城跡・田原寺跡の堀跡、北手之松山台場の熊野座神社などがある。薩摩軍が主に構築した台場陣地は主に1胸牆、及び1壕（塹壕）よりなる土製堡壘で、その形状は多岐にわたる。胸牆は壕を掘削した際の堆土で、その上に稲藁土嚢で嵩を増したり、畳などで補強している。また、戦闘の合間や終了後の夜間等に台場の補強増設等を行っていた。

4月25日に植木付近の薩摩軍陣地を見学した軍夫の日記によると「植木原ニ至リ賊ノ堡壘を見物す。植木町浦ヨリ木留村ニ連リその堡壘長し、総を民家ヨリ俵物等を得て台場ニ用ユ」⁽⁴³⁾と記している。

豊岡台地の陣地 政府軍側の記録『西南日誌原正澄筆記』によると「田原坂ノ賊ハ坂上宇田原小屋ノ要地ヲ根據トシ、且ツ船底村ノ裏手ヨリ裏村ニ至ルマテノ間處々ノ間道ニ臺場ヲ築キ、カヲ極メテ防戦ス」⁽⁴⁴⁾とあり、薩摩軍は北の本村や三ノ坂上から南の七本柿木台場までの間に陣地を構築していたようだ。政府軍の川口武定は薩摩軍陣地について「賊壘ノ築造ハ能ク兵法ニ合ヒ、其ノ壘タル多ク溝穴ヲ前ニ掘リ、圓錐ノ木ヲ此ニ列子樹テタリ、我カ兵進撃ノ際之ニ墮チ、傷痕ヲ被リシ者アリト」⁽⁴⁵⁾と記す。川口が見た薩摩軍陣地は壘前に溝穴を掘り、溝内に円錐状に切断した杭を並列させるなど手間が必要なものであった。『戦闘景況近衛歩兵第一聯隊第貳大隊第貳中隊』⁽⁴⁶⁾によると、薩摩軍は長窪山の山頂、山腹に梯形の壘を設置し、谷を隔てた中久保村民家には堡壘を構築して側面射撃を可能と記す。

3月7日の田原坂本道では午後1時から政府軍による攻撃が行われた。この戦闘については『近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊戦闘日記』⁽⁴⁷⁾が攻撃側の記録である。薩摩軍側の記録では豊岡村で、五番大隊五番小隊有馬要之助日記3月7日に「十二時頃食事ヲ為スニ、敵ノ長官シャーベルヲ抜キ兵隊ノ指揮ヲ為シ攻来ル。道程僅ニ十間ニ過ギザル土手ニ籠リ、銃ニ装剣、伏シ隠レ炮発ス。我隊ハ右半隊当番ニテ我輩モ之ニ有リ、互ニ炮発スル事漸クシ、故ニ左半隊馳来リ、暫クアリテ剣撃ニ及ブ。然レバ敵兵剣ヲ拳テ衝ントス、我兵声ヲ拳テ敵中ヲ斬レハ逃ク。故ニ逃クルヲ追、斬首凡ソ六十余、且ツ弾薬銃器ヲ分取、余モ銃打一挺ヲ取ル。既ニシテ先キノ処ヨリ一町ニ過キサル処ニ守ヲ附ケ、台場ヲ築ク可キノ令ニテ、有馬文蔵・柏木彦助、且ツ余其三人ニテ壘ヲ提ゲ西ノ方ノ畠端ニ運ブニ」⁽⁴⁸⁾とある。

この日は五番大隊五番小隊右半隊（一、二番分隊）が交代で付近の守備に就いており、有馬要之助の組か分隊は「道程僅ニ十間ニ過ギザル土手」に隠れて応戦。待機（非番か）の左半隊も加わり抜刀攻撃により政府軍を撃退した。その後、新たに台場を西の方の畠端に構築すべく壘を持って移動している。

轟村の陣地 轟村で守備についた四番大隊六番小隊池端方正の日記によると、3月6、7、9日と台場を構築している。6日は「老時頃敵方より押掛散隊江開、口功口り度相掛り攻出候得共又も敗走、矢張本台場相かまゑ居場所引取、今晚番兵杯張方相成候事、尤今晚台場築方有之。同七日晴、一今日昨日同断、敵攻掛相成候得共ニ打留ラレ勝利得事なし。今晚又々台場嚴重築方相成、今晚敵方より應砲無し、昨夜應砲瓦打通相成候。（中略）同九日少雨、一今日昨日同断、轟村大合戦、敵より押奇世致敗走又々五時頃敵より押寄せ夜戦。終夜此処も田原村轟より僅一二町位、敵手負戦死数数不知、我六番小隊今晚台場築方有之」⁽⁴⁹⁾とあり、3日間とも戦闘終了後の夜間に台場構築に従事していた。

陣地運用 田原坂での薩摩軍の陣地運用について、政府軍が見た状況について川口『従征日記』3月17日に記されているので解説する。「賊ハ常ニ四、五名ノ哨兵ヲ壘中ニ置キ、又展望兵ヲ各高所ニ置キテ瞭望セシメ、而シテ若干兵ヲ予備隊トシテ、其ノ後面ノ凹所、若クハ地物ニ據リ守ラシム。會々敵アルヲ望メハ、展望兵ハ火ヲ藁ニ點シ、白烟ノ烽火ヲ擧ク。予備兵之ヲ見テ直チニ進ミテ壘内ニ進入シ、其ノ守ヲ敵ニス、其ノ進退出没實ニ巧ナリト請フヘシ。本日ノ如キモ我カ兵不意ニ本道ヨリ進撃スルト雖モ、賊迅ニ烽火ヲ持テ予備兵ニ報シ、壘兵ヲ増シテ殊死防戦ス」⁽⁵⁰⁾

田原坂での薩摩軍は常に一つの台場に4、5名の哨兵を置いているが、これは伍列のことと思われ、一つの台場を伍組内で交互に番していたと考えられる。田原坂戦での日記や上申書には展望兵に該当類似する記録は見当たらなかったが、これは主に監視を任務とした台場と思われる。構築の陣地台場の規模にもよるが、1個分隊約50名で1カ所から5カ所程の台場の守備に交代でついていた。即応できる予備兵には台場警備で待機中の伍組と待機状態の兵が考えられる。また待機中は付近に設けた小屋や家屋にいたようだ。

『従征日記』で称賛された「直ちに壘に進みて進入、進退出没実に巧みなり」とは、三ノ坂上での本道、古道、間道での東西南北間の機動が容易であったことを指すと考えられ、薩摩兵の日記や上申書等からもうかがえる。和田素人の日記には「同七日旧廿三日、朝六時比ヨリ又前日ノ通、敵砲撃相初メ折角防戦中又左山手之方危ク應援申来、我同隊一番分隊僅拾七八名之人数、直ニ出張相成、銃二三発ニテ切込相成、段々太刀打高名之面々有之敵余多討取、追イテ暮六時頃引上相成」⁽⁵¹⁾とある。

k. おわりに

田原坂での発掘調査は薩摩軍右翼の二ノ坂、三ノ坂口、熊野座神社、中央では休居地区の公園北半部、左翼の公園南半部と一部しか調査が行われていない。左翼の中久保、南部の橘木・立花木地区や重要拠点で田原坂陥落のもとになった七本柿木台場一帯の調査はほとんどが未着手である。考古学的視点からの「田原坂の戦い」の理解には南部方面の調査は必要不可欠な重要課題である。

本稿は前稿を大幅に加筆修正したものである。作成に際しては「府県進達懲役人筆記」を集録した『鹿児島県史料西南戦争第二巻・第四巻』、九州臨時裁判所提出分の「諸庁上申書」⁽⁵²⁾を基礎史料としており、その内容を現存する従軍日記、回想録、覚書、名簿等で照合補足した。また、熊本、鹿児島、宮崎県下の市町村誌等も参考にした。

「府県進達懲役人筆記」作成は明治11年1月28日付太政官達第四号であり、提出期間は明治11年2月から11月であった。戦争終結後から日時も経過しており、特に日時には誤りがあり、地名、人名にも間違いが散見される。よって、裏付けは難しい部分がある。また、前回同様に発掘調査未着手の七本方面の薩摩軍の動向については必要最低限とし、木留方面を拠点として田原方面で戦った遊撃部隊も含めていない。調査漏れの小隊もあると思われ、これは全て筆者の調査不足のためである。薩摩側の研究書では『薩南血涙史』が参考になり、川崎紫三編『西南戦史』、黒龍会本部『西南記傳』は引用、使用には注意が必要である。

結びにかえて、今回多用した和田日記のうち、3月20日田原坂陥落の日の日記を掲げる。

加治木士族和田素人日記 加治木士族和田素人は36歳で六番大隊五番小隊小頭で従軍。3月25日木留口負傷。6月1日出張本営報知役で複隊。7月24日岩川で隊は離散し、28日帰宅した。のち8月6日戸長役場へ出頭帰順し、自宅謹慎後10月11日に免罪となった。13日から出兵中の日記の清書をはじめたが、家事多忙のため20年近く放置、明治32年(1899年)10月「子孫笑覧のため悪筆写染置」した。

「雨朝、未明より敵四方より巖敷砲撃いたし候付、臺場ハ勿論受持方限り詰所巖重ニ散兵いたし相待居候処、後本道筋味方敗戦相成、敵千人余植木宿迄突通り候報知有之候付、折角巖重相守り居候得共、最早糧道被絶候付、乍ラ残念一同引上候様決評相成、午前九時頃、各隊都テ後谷ノ様引上植木宿近く引上候処、植木宿ニハ砲撃繁ク相聞候付、植木へ進撃いたし度、或ハ熊本へ引上ゲ方可然決議相成引上ル途中、植木半里計リ本城ノ方向坂といふ所へ砲聲キビシク相聞候付、直ニ中途進軍いたし度評議中、最早味方新兵追々應援着隊有之防止候由、夜モ入候付老木口ノ方相堅メ候様、本営達有之候付直ニ案内召列、我二、五、七、三小隊繰出候処、何分夜中ニテ地理等全ク不明分折柄、国分隊ニモ田原坂引上来ルニ行逢候付、又昼休いたし候、三北宿へ引返シー泊いたし、尤今日ハ朝兵糧澤山有之三度食分一度二食べ候処其味モ無申計」⁽⁵³⁾

【註】

- (1) 鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料西南戦争第二巻』鹿児島県、1980年、621頁。
- (2) 辻正徳『南洲翁と西南の役』日置郡吹上町教育委員会、1977年、10頁。
- (3) 佐々友房『戦袍日記』新潮社、1986年、78～79頁。
- (4) アジア歴史資料センター「戦闘報告第一回」『陸軍省大日記』明治10年防衛研究所、Ref. C09080857200
- (5) 鈴木徳臣「西南戦役における西郷軍の成立と編制」『軍事史学』第五十二巻第三号、2016年
- (6) 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料西南戦争第四巻』鹿児島県、2008年、427頁。
- (7) 同、416頁。
- (8) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第二巻』223頁。
- (9) 塩満郁夫「河野翁十年戦役追想談」『敬天愛人』第十八号(財)西郷南洲顕彰会、2000年、256～257頁。
- (10) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第四巻』183頁。
- (11) 高岡町史編さん委員会『高岡町史上巻』高岡町、1987年、705～706頁。
- (12) 茂野幽考『皇国海防秘史』新興亜社、1942年、240頁。
- (13) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第四巻』443頁。
- (14) 「田原坂三ノ坂における薩摩軍の配備状況」『田原坂Ⅲ』22頁「左翼は一番大隊七番小隊、五番大隊九番小隊」としているが、五番大隊九番小隊は誤りで国分郷の七番大隊九・十一番小隊が正しい。
- (15) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第二巻』16頁。
- (16) 和田素人『拾年の役軍中日記』加治木町招魂墓世話人、1966年、3頁。
- (17) 中村稲男編『西南の役田原坂資料集歴史のはざまに』植木町、1990年、8～9頁。

- (18) 和田素人『拾年の役軍中日記』3頁。
- (19) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第二巻』617頁。
- (20) 中村稲男編『西南の役田原坂資料集歴史のはざまに』55頁。
- (21) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第四巻』158頁。
- (22) 垂水市史編集委員会『垂水市資料集(一)』鹿児島県垂水市、1977年、59～60頁。
- (23) 和田素人『拾年の役軍中日記』4頁。
- (24) 同、5頁。
- (25) 川内郷土史編さん委員会『維新戦役従軍記』川内市町横山正元、1974年、149～150頁。
- (26) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第四巻』279頁。
- (27) 中原幹彦『西南戦争のリアル田原坂』新泉社、2021年、65～66頁。
- (28) 「鹿児島征討日誌出征第二旅団砲兵第四大隊第二小隊」JACAR:C09083955500
- (29)、(30) 和田素人『拾年の役軍中日記』5頁になるが、頁数欠落。
- (31) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第二巻』804～805頁。
- (32) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第二巻』717頁。
- (33) 同、866頁。
- (34) 高岡町史編さん委員会『高岡町史上巻』高岡町、1987年、707頁。
- (35) 中村稲男編『西南の役田原坂資料集歴史のはざまに』10頁。
- (36) 和田素人『拾年の役軍中日記』3～4頁。
- (37) 同、4頁。
- (38) 塩満郁夫「兵役省察編(有馬要之助従軍日記)」『敬天愛人』第三十六号、202頁。
- (39) 川内郷土史編さん委員会『川内と西南の役』鹿児島県川内市、1977年、6頁。
- (40) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第四巻』95～96頁。松木亀五郎は松元龜五郎の間違い。「丁丑擾乱」『鹿児島県史料西南戦争第一巻』1028頁に松元の物語。
- (41) 鹿児島県『鹿児島県史料西南戦争第二巻』800頁。
- (42) 同、804～805頁。
- (43) 五野保萬『五野保萬日記』校丁高木誠二、1983年、55頁。
- (44) 東京大学史料編纂所蔵「西南日誌原正澄筆記」(4140.7-45)
- (45) 川口武定『従征日記上巻』新潮社版、1988年、142頁。
- (46) アジア歴史資料センター「戦闘景況」防衛省防衛研究所、Ref. C09083505700
- (47) 「近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊戦闘日記」JACAR:C09083957400
- (48) 塩満郁夫「兵役省察編(有馬要之助従軍日記)」202頁。
- (49) 根占郷土誌編さん委員会『根占郷土史上巻』根占町長平野広二、1974年、461頁。
- (50) 川口武定『従征日記上巻』163～164頁。
- (51) 和田素人『拾年の役軍中日記』4頁。
- (52) 東京大学史料編纂所蔵「諸庁上申書」、「征西始末」については松沢裕作「明治太政官における歴史記述の模索」『東京大学史料編纂所研究紀要第二十一号』を参照。
- (53) 和田素人『拾年の役軍中日記』6頁。